資料3

北極海の安全保障環境

―わが国の防衛上の観点からの考察―

平成23年度第２回日本北極海会議
2011年９月15日

海洋政策研究財団
秋元一峰

結論

○　北極海を舞台とした戦争は高くつく
○　SLOCには多様な選択肢
　　軍事作戦に多様性、迅速性、柔軟性

1 北極海の融氷がもたらす新たな地政学

（1）海上交通の変化

①ショートカット航路の出現
②シーレーンが一つのサークルを形成
③航路選定に複数の選択肢

（2）軍事的意義

①迅速な兵力展開、柔軟な作戦計画
②北極海への海軍力プレゼンス
③北極海からのパワープロジェクション

（3） 地政戦略概念の転換

ハルフォード・J・マッキンダー

・・・ハートランドを制する大陸国家が世界島を支配し、
世界島を支配するものが世界を制する。

前提：ハートランドの北はアクセス不能な北極海

ニコラス・J・スピークマン

・・・リムランドを制するものがユーラシアを制し、
ユーラシアを支配するものが世界を制する。

前提：北極海縁辺部から大陸へのアクセス不能

＊古典地政学に止まらず、従来の安全保障戦略もまた、
北極海が航路として使えないことが前提

＊北極海の融氷＝古典地政学と従来の安全保障戦略を根本から覆す

（4）北極海の地勢と制海

○冷戦時代の北極海＝米ソのバッファーゾーン
「氷」が防御、攻撃：大陸間弾道ミサイル、潜水艦発射ミサイル、
対立面：「領土」対「領土」
＊唯一、チュコトーアラスカ；「海域」対「領土」
○融氷の北極海＝北極海を制海した国が戦略的主導権を握る
「海域」対「領土」
軍事的に対立する国家間に海域があれば、
制海権を握ることが軍事上の鉄則
＊国際海洋法＝領海、国家管轄水域、公海
＊軍事の世界＝「制海している海域」と「制海されている海域」
制海権＝有事：海軍力の排他的展開、平時：海軍力のプレゼンス

2　北極海の戦略環境

○　北極海沿岸諸国＝カナダ、アメリカ、ロシア、ノルウェー、
デンマーク・・・ロシア以外はNATO加盟国
大西洋からのアクセス＝NATOがコントロール（＋アイスランド）
冷戦時代・・GIUKライン
太平洋からのアクセス：ベーリング海峡＝アメリカとロシア
○　北極海＝ロシアだけが
プレゼンスを
維持できるインフラ
融氷＝北極海こそ
ハートランド？

3　北極海の安全保障を巡るプレーヤー

（1）ロシア

○北極海における軍事活動を活発化

－2008年、爆撃機による北極圏定期哨戒の再開

－2010年、北洋艦隊配備デルタⅣ原潜の耐用年数延長

－2011年、デルタⅣ原潜からの新型戦略ミサイル試射
バレンツ海からオホーツク海へ

○ロシアの軍事活動の目的

北極海の制海＝資源の確保と北東航路のコントロール

○ロシアの軍事活動活発化に対する周辺国の反応

2011年7月5日の北極2個旅団新設発表に対し、

－NATO事務総長＝「NATOは北極に部隊配備の計画はない」、しかし、
「北極海のプレゼンス増強が必要」
「アメリカ・カナダ・ノルウェー・デンマークの共同行動が重要」

－ノルウェー＝国防省「ロシアの活動は軍事目的ではなく国際貢献」
外務省「慎重に検討してコメントする」

－スウェーデン＝「ロシアは北極海の重要なプレーヤーであり、その活動を支援すべき」

（2）アメリカ

アメリカの北極海における防衛政策に関するドキュメント

①National Security Presidential Directive 66、Homeland Security Presidential Directive 25、2009

②National Security Strategy2010 、

③Quadrennial Defense Review 2010、

④Department of Defense Report to the Congress on Arctic Operation and NW Passage 2011、

⑤Command Plan 2011

○　大統領指示

国家としての関心＝領域主権と国益の確保
そのため、
①Navigation Freedom、②Missile Defense、③Early Warning、④Strategic Sealift、⑤Strategic Deterrence、⑥Maritime Presence、⑦Maritime Security Operation、⑧Anti-terror
の実行を指示

○　国防総省の構想

－展望
「資源を巡っての紛争生起の可能性は否定できない」
－長期計画
Near-term(2010-2020)、Mid-term(2020-2030)、Far-term(beyond2030)
北極海航路が信頼性をもって利用できるのは2040年と見積もり

－軍の任務

①Maritime Domain Awareness、
②Search and Rescue、
③Regional Security Cooperation、
④Humanitarian Assistance/Disaster Relief、
⑤Maritime Security、
⑥Power Projection、
⑦Sea Control、
⑧Strategic Deterrence、
⑨Air and Missile Defense

＊US Navy Arctic Roadmap 2009

2014年までの装備等整備計画。2014年以降はQDRに従って整備

第一段階（2010年）：即応態勢と任務査定、戦略目標策定、
海洋法条約への加盟促進

第二段階（2011年、12年）：北極海における海軍作戦能力評価、
人道支援災害救助態勢の確立

第三段階（2013年、14年）：北極海の安全保障環境安定化への行動

＊作戦担当（Command Plan 2011）

北極点周辺と西側（カナダ側）
＝北方軍（USNORTHCOM)
東側（ロシア側）
＝欧州軍（USEUROCOM）

（３）北極海を巡る関係諸国の動向

○　カナダ

北西航路のコントロール

Operation Nanookの実施；カナダ海軍、カナダ騎馬警察隊、カナダ沿岸警備隊、米海軍、米沿岸警備隊、デンマーク巡視艇等

○　デンマーク

2010年～2014年国防計画：グリーンランドのチューレThule基地の強化、北極作戦担当部隊司令部・任部部隊の新編、航空機定期哨戒の実施

○　ノルウェー

3軍統合司令部をボーデに移設、＊2009年にトロムソ近郊の海軍基地閉鎖

・・・潜水艦整備用フローティング基地を構想

ロシアとの合同海軍演習The Pomor-2010、2011を実施

○　スウェーデン

2010年、国防省、北極海の空海軍力強化を発表。即応態勢の強化、戦闘偵察機100機体制（デンマーク、フィンランドの2倍）、在来型潜水艦建造等で80億ドル予算

４　日本の防衛政策への影響

○北極海～北東アジアを結ぶ新たなシーレーン

－新たなシーレーンの防衛

－北太平洋のMaritime Domain Awarenessのための活動

－中国、ロシア、韓国によるシーレーン防衛との係わり

－南北二正面作戦？

○日米同盟として

太平洋軍の作戦の支援

X アメリカとロシアの現状

○　アメリカ

－現有兵力の評価

・運用可能兵力：スキー装備HC130ヘリ、
氷海仕様Los Angeles級原潜、Ｐ-3哨戒機、
F-22戦闘機
＊水上艦艇に耐氷仕様なし

・作戦能力：極北における指揮通信能力欠如
（70度以北は長波に障害）
GPS未完成、航路地図測量不十分、MDA不十分

－基地機能：2020年までにアラスカに水深のある港を作る
計画なし

－駐屯部隊：冷戦時、アラスカに第６軽歩兵師団
冷戦後、第６歩兵旅団に縮小

○　ロシア

－駐屯部隊

チュクチ地域：冷戦時、第９９歩兵師団分遣隊＋防空システム
冷戦後、第９９歩兵師団と防空システム削減

－艦隊

北海艦隊：冷戦時、大西洋が主作戦正面
冷戦後、北海艦隊の規模縮小
北極海での作戦担当兵力は、
戦略ミサイル潜水艦DⅣ、遠距離爆撃機

＊　アメリカ海軍のイージス艦の北極海展開を危惧

＊「今、ロシアには氷もなければ軍隊もない・・」（ロシア海軍）

“Don’t trouble trouble until trouble troubles you”

結論

- ○ 北極海を舞台とした戦争は高くつく
- ○ 北極海は潜水艦作戦に不向き？
- ○ SLOCに多様な選択肢
- ○ 安全保障の枠組みは脆弱
  経済的結びつきは離れ難い
  資源争奪は経済的結びつきを破綻

シーパワーの攻防

○海軍力の展開が可能な海域
→ 覇権か、バランスか

○攻防史
点と線
→ オセロゲーム
→ 囲碁

海域ごとのレジームが重要